早く活動出来る日を待ちたいものです。

マスクは日常の風景





句座のよろこび

木 正 子

進めましたことは、得難い貴重な経験でありました。 お願いを申し上げます。各選考委員会も、 叶わず、全てお送りすることとなりました。ご理解とご協力を 員での紙面議決により、承認を得ることとなった次第です。 て頂くことになりました。残念ながら各賞の表彰も対面授与は 結果につきましては、俳人協会報八十五号を通じ、報告させ スタートとなりました。総会も開催日直前に中止の決定。 新型コロナウイルスの緊急事態宣言のなか、令和三年度の 紙上での意見交換を

終刊の知らせなどは、とても残念に思います。 機会も失われ、また、高齢化は否めませんが、句会や俳誌の これまでの一年数カ月は自粛生活が続き、俳句を語り合う

させられます。

りの句座に感動し喜びを分かち合いました。 合わせての俳句会を開くことが出来、人数制限の下、 重に守った上での、公共の会場の使用許可も出ました。 行くべきだとしみじみと感じ入りました。感染拡大防止を厳 ピンチ」を「チャンス」と考え、時間をかけて乗り越えて 六月にはワクチン接種も始まりました。少しの光りが見え、 俳句以外の事でもこれまで何度かの難局に会いましたが、 暫くぶ 顔を

第 85 号

令和3.6.20 Ш 〒九九四 - 00一二 形 県 天童市久野本四 俳 〇二三一六五四=

〇二五八

協

とでしょう。 過ごしていました。日常茶飯事がいかに大切であるかを痛感 四十雀が使ってくれたようでした。冬季は、裸木に林檎を挿 などしています。先日は庭の樹々に巣箱をかけたら、 す。筆者も皆様とは会えなく、ちょっとそこまでの一人吟行 いを求め、それが自ずと季語との出合いを導いてくれる筈で 式の句座が何よりも代えがたいと実感している会員も多いこ き交う現実に置き去りになるかも知れませんが、やはり対面 の前でつい、二の足を踏んでしまいそうです。IT産業の行 どの程度の俳人がついて行けるのかと不安も増します。 などの使用が多くなりつつ、「アナログ」世代にとりましては てしまったようです。この先の句座はテレワークやリモート となり、冬の季語ですが、季節を問わず新しい顔の一 し、次々に啄む鳥たちを窓越しに眺め束の間の癒しの時間を 当り前の日々が脅かされている今、植物や生物との触れ合 部となっ 山雀や 機械

いくと信じます。 向上しにくく、互選を受け、 句座は束の間の緊張感が良く、 自分の句を知り推敲して伸びて良く、俳句は一人で作っていても

える日が待ち遠しい限りです。 会員の恙無いことを祈りつつ、 の声や、草花を愛し、風を感じる詩人でありたいと思います。 きな力を借り、俳句を詠み続けて欲しいと願っています。鳥 残りますが、この大変な時代に強い気持ちと、季語と言う大 コロナ禍のため、どれ程の事業計画を実行出来るか不安は 各行事に参加し喜びを語り合

第四十三回山形県新春俳句大会

뇓 ð 令 和三年二月

入 阿 選 部 作 月山子 品

当季雑詠の部

選

巡視船つるぎの舳先松飾 初点前季語で決めたる茶杓銘

大寒や煙吐き出す兜屋根

秀

逸

酒田市 東根市 名和

加藤

笹原 茂

形市

土田 薫

東根市

人日やさんげさんげの法螺響く

鶴岡市 東根市 栗原 結城 トミ子

鶴岡市 成澤

神将彫る夫の指先寒の入 取替へし鎮守の鳥居年新た 雪折の千年欅学び舎に 栃餅に湯殿の山の塩あづき

天童市

伊藤

冬晴れて蔵王連峰光り合ふ 初詣大黒の笑み貰ひけり ふるさとの味を求めて切山椒

佳

女正月測つてもらふ骨密度

横殴り波の花飛ぶ能登荒磯

真水汲む頭上に青き冬北斗 淑気満つ堂の奥なる朱唇仏 村結ぶ荷渡地蔵冬籠り

山形市

大井田千代子 鈴木

東根市

青山

山形市

空席のほかはマスクの指定席 ひさかたの光たたへて初硯

降る雪は昭和の頃の嵩となり 大鯛を最後に下げて団子花

米沢市

小島

山形市 山形市

武田

字井千恵子

面会のかなはぬ母に毛糸編む 三山を祀る羽黒や初霰 病む夫の今しあはせと水仙花

> 大石田町 山形市 山形市 折原 伊藤 柏倉ヤス子

長井市 こせき貴美子 山形市 伊藤

齋藤 加藤けい子

冬の山獣の息と神の息

凍滝のかすかなる音の里の山

工藤

西川町 鶴岡市 鶴岡市 南陽市

天童市 伊藤 清野佐知子

雛僧のつま先歩き春の雪

雛僧はおさない僧、小坊主を言うが、ホッララ゙

春の雪が薄らと積

清野佐知子

飛鳥に通う定期船が遠くに見えたのである。大景。

酒田市の日和山や大浜、最上川河口では凧を揚げたりする。

飛島に通ふ船あり凧揚がる

大江

特

選

兼題の部

「凧」「春の雪」

選

評

た道や庭をつま先立ちに下駄で恐る恐る歩く姿が目に浮か

兼題の部 「凧」「春の雪」

特 選

少年の風読む指や凧日和 雛僧のつま先歩き春の雪 飛島に通ふ船あり凧揚がる

山形市 東根市 大江

洋子

くなり、糸も太くなる。人差し指等を使い凧糸を操る。

凧も大小様々あるが天上高く揚げるには、それなりに大き

菊地みさ子

菊地みさ子 清野佐知子

入 選

淡淡と男の点前春の雪

音たてて降る庄内の牡丹雪 金色の信長像に牡丹雪 果樹畑の残る鷲凧唸り飛ぶ 大空へ海風を受け酒田凧

> 東根市 酒田市 東根市 河北町 藤丸 髙橋 古関 猪股とみを 辰夫

鶴岡市

池田

少年の風読む指や凧日和

木 正 子 選

当季雑詠の部

特 選

大寒や煙吐き出す兜屋根 鍵形に曲がる城下の淑気かな

ふる里にビデオ送付の年賀かな

河北町 須藤

山形市 上山市 笹原 佐藤権

秀 逸

先生の手加減したる雪礫 枝折れを見守る農夫輪樏

遺言を書いて手酌の年始酒 凍雲や歩いて渡る天井川 両目入る達磨燃え出す大どんど 面会のかなはぬ母に毛糸編む 初日射す開校を待つ新校舎 山形市 鶴岡市 東根市

岸

門脇

本間

東根市 上山市 山形市 青山 堀川 伊藤 結城トミ子 栄助

東根市

鈴

凧揚げの帰りは父の肩車

川風がびんびん鳴らす凧の糸

東根市 米沢市 山形市

凧あげ

の少年空へ身を反らす

特

選

兼題の部

「凧」「春の雪」

佳 作

しばれるやじよんがら節の唸る夜 門標の新しき名や春の雪 肩書も昭和も遠く去年今年 初鏡意地を通して生きてゐる 高砂の一声シテの淑気かな 竹林のさやぐ参道笹子鳴く 出初め式梯子に掛ける命綱 寒の鯉盥の水を弾き出す Щ 燗熱うせよ二千字を書き上げて 伊勢海老の姿造りの髭ゆるる 潮鳴の激しき日なり波の華 長命の家系といはれ薺粥 宿題のタペストリーの縫始 水切りの石の煌めき春兆す 眠る橋開通のふもと村 大石田町 東根市 白鷹町 天童市 東根市 山形市 鶴岡市 天童市 酒田市 酒田市 埼玉県 山形市 遊佐町 山形市 菊地 増田 野村 小野 小玉 柏倉ヤス子 恵子

東海林朝子 髙橋喜恵子 フミ

> 地下足袋の父が加勢の凧上る 良く揚がる凧糸そつと子に渡す 貯木場の杉匂ひくる春の雪 凧糸の指図の爺は杖をひく

鶴岡市 天童市 天童市 山形市 河北町

佐藤

髙橋喜恵子

岡崎 三浦 古関

節子

進

斎藤耕次郎 あい

兼題の部

選 評

特 選

凧あげの少年空へ身を反らす

空へ身を反らすの、捉え方が抜群。 印象鮮明でインパクト

金谷ゆかり

が見事です。

凧揚げの帰りは父の肩車

父と子の愛情が現れ、凧を通しての実景がほのぼのと暖か

緑泉

い空気が一面に漂ってきます。

川風がびんびん鳴らす凧の糸

「びんびん」のオノマトペを用いリズムも出ました。少年

阿部美和子

の顔が勇ましく、素材を良く見据えた作品となりました。

小島 金谷ゆ 阿部美和子 緑泉 かり

> 入 選

月山

の青天統べる絵凧かな

黒

坂 重 政 選

息でぐつと飲み干す寒の水

酒田市

秀 逸

月山の祖霊は風に山眠る

山形市

齋藤

眞人

生命線少し付け足す日向ぼこ 空席のほかはマスクの指定席 ふるさとへ帰省するなと云ふ寒さ

当季雑詠の部 選

新妻に家紋受け継ぐ雑煮椀 肩書も昭和も遠く去年今年 書初や墨たつぷりと李白の詩

> 山形市 東根市 斎藤耕次郎

鈴木

山形市

遊佐町 渡部 小松 次代

山形市 山形市 南陽市 武田 石澤 菜美

手を洗ふ水の重さや冬隣

ひさかたの光たたへて初硯 女手で守りし家の白障子 寒禽の来ぬ一日と記しけり

河北町 渡辺 木嶋 玲子

山形市

願ひ込め禍を福とせむ筆始 正月の光まぶしき八十路かな

特 選

兼題の部

「凧」「春の雪」

水を噛む水車ごとりと冬日燦

天童市 南陽市

岡崎

加藤け 渡辺

い子

冬の山獣の息と神の息

山の気を蜜に込めたる冬林檎

河北町

洋子

山形市 大江町 東根市 天童市

齋藤

鰐口も鈴も控へ目初詣

書き出しはコロナ不安の初日記 着ぶくれて観音堂に集ひけり 静けさの中に過ぎゆく三ヶ日 淑気満つ観音堂の絵蝋燭 読初や巨大津波の体験記 崩れては火の粉巻き上ぐどんどかな

山形市

志鎌惠美子

栗原

山形市 鶴岡市

髙橋

野村

青山

春雪や五年日記の三年目

鳥海の風にのりたる武者の凧 凧あげの少年空へ身を反らす

> 酒田市 白旗いちこ

鶴岡市 山形市 齋藤 金谷ゆかり 峯男

入

選

山形市 山形市 上山市 栗原ただし 字井千恵子 木村比紗子

春雪や鎮守の杜の舞楽殿

点に力をあつめ武者絵凧

佳

作

三が日日の丸揚げて祝ふ無事

鶴岡市

帯刀

春男

淡淡と男の点前春の雪 墨の香をまとはせ凧に書く一字 音読の荘内論語春の雪

鶴岡市 帯刀

山形市 山形市 河北町 上山市 伊藤 古関 淑子 春男 進

着ぶくれて観音堂に集ひけり 寒の鯉盥の水を弾き出す

東根市 山形市 遊佐町

青山

仕上げとて菊菜をわしと掴み入れ

特

選

当季雑詠の部

藤

寬 選

秀

逸

選

評

兼題の部 「凧」「春の雪」

選

春雪や五年日記の三年目

凧あげの少年空へ身を反らす 貴重な自分史である日記。下五に真摯な作者像浮ぶ

鳥海の風にのりたる武者の凧

大空を一人占めの少年。下五の措辞に躍動感あり。

出羽富士の風にのる勇壮な武者絵凧。 力強い句である。

金谷ゆかり

齋藤

峯男

空席のほかはマスクの指定席 冬の雨瑠璃色に山暮れにけり 山形市 山形市 南陽市 佐藤 折原 宇井千恵子

正代

福寿草ゴールド免許更新す 大榾を返せば火色澄みにけり

面会のかなはぬ母に毛糸編む 鐘楼の雨の雫や竜の玉

凍滝のかすかなる音里の山 巡視船つるぎの舳先松飾 腹割つて語る友ゐてふかし藷

東根市

阿部美和子

山形市

伊藤 伊藤

ふみ

酒田市

加藤

山形市 山形市

栗原ただし

女正月測つてもらふ骨密度 どんど火の奥に立つものひしやぐもの 長井市 こせき貴美子 山形市 山形市 鈴木 清野佐知子

あい

冬晴れて蔵王連峰光り合ふ 凍み大根遠き蔵王嶺晴れ渡り 大寒や煙吐き出す兜屋根

山形市 山形市 笹原

笹原

佳

白旗いちこ

燗熱うせよ二千字を書き上げて

久々に結ぶネクタイ初鏡

東根市

結城トミ子

東根市

菊地みさ子

山形市

福耳を揺らし仏陀の大嚔

寒禽の来ぬ一日と記しけり

薄氷を踏んで大地を目覚めさす

酒田市

したらきょうこ

落し蓋ぶつぶつ鳴りて年つまる

東根市 遊佐町

大江 小松

作

東根市 伊藤

初雪や土間は豊かな食糧庫

米沢市 西川町

餅の花話に花が咲きにけり

空港のタワー掻き消す春吹雪

東根市

門脇

兼題の部 凧 「春の雪

特 選

山 形の空にぽかんと凧

蔵王嶺を越ゆる勢ひやいかのぼり 雛僧のつま先歩き春の雪

山形市 清野佐知子

山形市

佐治よし子

上山市 北澤 和美

入 選

底抜けの空の青さや奴凧 父と子の日暮の径や凧

少年の風読む指や凧日和 川風がびんびん鳴らす凧の糸

山形市 東根市 東根市 大井田千代子 菊地みさ子 阿部美和子

山形市

遠藤

選 評

兼題の部 凧

「春の雪」

特

選

山形の空にぽかんと凧 か遠くの何処かの空へと。わざわざ置いた上五「山形の」に 山形の空に浮かんだ凧を見つめる作者の想いは、やがて遥 佐治よし子

滲む孤独感

雛僧のつま先歩き春の雪

修二会の水取りにはかん高い沓の音が、 春の雪にはつま先 清野佐知子

俳句大会のお知らせ

就是我是是我是是这种的,我们也是我们的是我们的,我们也就是我们的,我们也不会有一个人,我们也会会会会会会会会会会会会会会。""我们也是这种是这种是是我们的是我们 1966年,我们也是我们是我们的是我们的是我们的,我们也是我们的,我们也是我们的,我们也是我们的,我们也是我们的,我们也是我们的,我们也是我们的,我们也是我们也

すのでご注意ください。 コロナの情勢により、内容が変更になる場合がありま

県俳人協会主催・共催

◇第六十四回全国俳句山寺大会

◇第四十三回山形県俳句大会 〉第三十二回東北俳句大会・岩手大会

〉第五十二回芭蕉忌俳句大会

本誌大会案内参昭 紙上大会

令和三年十月三十一日(日 山寺芭蕉記念館

県俳人協会後援

◇第三十三回奥のほそ道天童紅花まつり俳句大会 七月三日(土)~七月十一日(日

◇月山俳句大会

未定

◇第四回上山市民俳句大会

〉~芭蕉十泊のまち 投句締切 七月二十六日(月) 尾花沢~第三十二回山形県少年少女俳句大会 十月十七日(日) 上山市中部公民館 表彰式 十一月六日(土

新说的是我们的这是是例如我是是别是我是有一个人的,我们就是是我们的,我们也是我们的,我们也没有一个人的,我们也会会会会会会会,我们也会会会会会会会会会会会会会会 1966年,我们就是我们的,我们就是我们的,我们就是我们的,我们就是我们的,我们就是我们的,我们就是我们的,我们就是我们的,我们就是我们的,我们就是我们的人们的

歩きの音無しが似合う。季語 ることなく、巧みな表現。 「春の雪」 の情趣に飲み込まれ

北澤

和美

蔵王嶺を越ゆる勢ひやいかのぼり

どこまでも飛ばしてみたい欲求にかられたことを思い出す。 句の構えがしっかりしていて調子の張った句。 子どものころ、凧の糸を持ちながら、この糸を放して凧を

令和二年 山形県俳人協会賞

準賞

句集『白鳥』

加藤

爽

令和二年 山形県俳人協会賞選考経過について

選考委員長 黒坂 重 政

文集「宥座の器」戸田正宏の二冊である。会員の個人句集である。今回は、句集「白鳥」加藤爽と、句会員の個人句集である。今回は、句集「白鳥」加藤爽と、句をて、対象の句集は、令和二年度に出版された県俳人協会

共感できる名言である。ある」、「俳句は器量である」等々、ある」、また、「俳句は姿勢である」、「俳句は器量である」等々、著名俳人の名言に、「俳句は生きた軌跡であり、心の日記で

次に、各句集の印象に残った作品を抄出してみよう。俳歴も長く、自然、境涯と対峙して自在である。七十代、「宥座の器」の著者、戸田さんは六十代であり、共にこの度、選考対象となった「白鳥」の著者、加藤さんは

◎加藤爽さんの「白鳥」は、庄内、東京と多忙な中、庄内の『如藤爽さんの「白鳥」は、庄内、東京と多忙な中、庄内の『白鳥』は、庄内、東京と多忙な中、庄内の『白鳥』は、庄内、東京と多忙な中、庄内の『加藤爽さんの「白鳥』は、庄内、東京と多忙な中、庄内の

・白鳥の飛来に句会始まりぬ

繋がれてをること知らず鯉幟

◎戸田正宏さんの句文集「宥座の器」は、伝統ある菓子店の◎戸田正宏さんの句文集「宥座の器」は、伝統ある菓子店のの一里である。文庫本仕立てであり親しみやすい。ただ、上生のである。文庫本仕立てであり親しみやすい。ただ、上生人らしく、俳句作品と「和菓子歳時記」を縦横に綴った

・立冬の鯉が金魚になりたがる

・羽化の蟬明日はひかりに加はらむ

は加藤爽さんの句集「白鳥」を準賞に決定した次第である。連絡、準賞での了解を得る。以上の経過により、令和二年度今後への期待で準賞妥当の通知あり。再度、協会賞推薦者へ賞推薦二名と同点のため、鈴木正子オブザーバーへ内申した。省の場所な内容になるが、句集「白鳥」協会賞推薦二名、準していたので、スムーズな紙上選考ができたものと思っているで、判定は今回、事前に全委員に選考経過報告書を依頼される。

俳人協会賞をいただいて

加藤 爽

変驚き、そして子供のように嬉しく思いました。 この度は山形県俳人協会賞準賞をいただくことになり、大

答えはよくわかりません。 ました。以来、ただの一度も休むことなく淡々と、そして楽 ずもなく、締め切り間際には相当深刻に追い詰められること も事実。それなのに楽しいと感じるのは何故なのでしょう、 しく続いております。しかし十七文字が容易に思い浮かぶは 九年前には、鶴岡酒田に新たな仲間が集い、句会が始まり 生まれて初めて俳句に関わって以来十五年がたちます。

長様、 その結果、このような評価を戴けましたのは、当地の神々し りを続けて参りたいと思っております。 かげと、つくづく有難く、心から感謝を申し上げるばかりです。 ぐにそれが無知の為せる技とわかり、大変苦労を致しました。 ,ばかりの大自然や深い文化のおかげ、そして、県協会の会 これからも、四苦八苦、一進一退を楽しみながら、俳句作 句集に纏めたいと思ったのは軽い好奇心からでしたが、す 委員の方々に温かくお読みいただけた巡り合わせのお

																		第
"	"	"	"	11	"	"	"	"	11	"	"	"	入選	"	優秀賞	大賞		三回
つばくらめ	逢ふ	待春	スイスアルプス	道標	転勤族	童心	古稀	枯野	雪のまち	柿の空	楢下宿	己がじし	古道六十里越	直面	鳥渡る	月山	競詠俳	山形県
髙橋喜恵子	斎藤 静子	新野美佐子	齋藤八重子	横道輝久子	木原 邦彦	栗原ただし	佐藤権一郎	小島 緑泉	猪俣とみを	木村比紗子	齋藤 眞人	鈴木 あい	帯刀 春男	牧	伊藤 厚子	栗原 愛子	句賞入選	

回山形県20句競詠俳句賞

優秀賞 優秀賞 夬

「鳥渡る」

栗原

直 面

牧伊藤 學

20句競詠俳句賞の選考を終えて

選考委員長 伊 藤 寬

いただいた。この賞が会員の皆兼こ号、『、なかったものの、当初予想した五十編を大きく上回る応募をなかったものの、当初予想した五十編を大きく上回る応募を第二回は五十八編の応募があった。昨年の第一回には及ば た証であろう。

より順位をつけた。 選考方法は、各選者が上位十編を選び、 点盛りの合計点に

れた。ほかに十四編を入選とした。 藤厚子さんの「鳥渡る」と牧靜さんの「直面」の二編が選ば「その結果、大賞に栗原愛子さんの「月山」が、優秀賞に伊

品集、賞品をお送りした。 応募者全員に各選者の選評、入賞した十七編をまとめた作

と同じ空気の中に置かれていなくてはならないということだ。 こと。次に、文体が多様で飽きさせないこと。加えて、 る。条件としては、まず一句一句がちゃんとした俳句である つけ方や句の並べ方にも気を配らなくてはならない。 旬一句は独立した俳句であっても、いづれの句も20句一連 この賞に選ばれるためには、総合的な俳句の力が必要にな また、20句には、その昔の歌仙の面影がある。だとすると、 題の

今回応募を見送られた方々には、 れた作品といっていいだろう。 大賞一遍と優秀賞二編は、まさに総合的な俳句の力が認め 次回は是非参加していた

まとめるにあたってはそこも大事にしたい。

ている。迷いの後に悟りが来て、悟りの後にまた迷いが来る。 だき、日頃の勉強の成果を披露し競い合ってほしい。 句づくりとはそれの繰り返しだからだ。もし、俳句に対し 自分もそうだが、仲間たちの多くも迷いながら俳句を作っ

だきたい。 よりいっそう深め、自身の新たな俳句の天地を見出していた この賞にチャレンジすることにより、俳句に対する理解を

ない人だと思う。

て迷いや悩みのない人がいるとすれば、

それは勉強をしてい

くくりたい。「」内は題。 応募作品の中から、心にとまった句を一句ずつ上げて締め

る里の山河に遊ぶ」雁戸まで雪来て蔵王その上に「雁が音」 青空に近づきぬ「父の忌」桜咲く鼓笛隊行く城下町「柊」天 る音の他はなし「雪国」子を包む母の形見の毛布かな 町」まづ声の山門くぐる小六月「たんたんと」雪降るや墨擦 の川一番星の上にあり「流転」節分や雪の里には雪の鬼「ふ 梅雨寒の猫まとひつく一日かな「冬の日のこと」乗馬して冬 る」旅に出る霜月の空危ぶみて より日本海 の日々」草紅葉関守石の縄黒き「ラムネ玉」風除を解きて窓 や小六月「小さきマスク」やや抱きてかけよる窓辺初雀「寺 かうかうと冬の鳥啼く朝ぼらけ「冬の日々」乳臭き頬の産毛 める忘年会「四国遍路」今年竹撓み参道長きかな「冬の朝 冬至とは小豆かぼちやを喰ふ日なり「復興」全員で中止を決 「糸巻」粽解く笹の筋目も味のうち「つれづれなるままに」 「去年今年」重き雪ただ黙々と運びけり「旅に出 「四季

月山の稜線染めし禅定花

椒魚仏生池に孵りけり

断崖に深山竜胆縋りゐし

雲の峰大梵天の祓ひ受く 本宮の高き石垣薄雪草 断崖を吹き上げる風ケルン積む 源流の雪解け水を掬ひ飲む 踏みしめて雪渓渡る一列に 露座仏に深山辛子の供花なせり

月 Щ

笹叢に夏鶯の谷渡り 夏霧の尾根を超えゆく速さかな 参拝の行者連なる青嶺かな 尾瀬河骨訪ねる人に道譲る 産卵の森青蛙泡の中 湿原を一面に染め金黄色 法螺貝の響く月山山開き 赤き腹見せて池塘の蠑螈浮く 月山の雪より白き雛桜

月読命(つくよみのみこと)が祀られ、

大勢の信者が山頂ま 開山祭が行われる。

月山は七月一日、

山頂の月山神社で、

栗原

で登り祈願する。

月山は私の大好きな山で、年に二~三度は訪れている。

こともある。茶屋跡には、土台の石組や風呂場跡、厠跡があ 雪渓が眼下に昼飯を食べ、仏生地の山椒魚を覗いたり、 高山植物の名前や、生き物の名前を教えてもらった。また、 から秋の紅葉まで。羽黒休暇村のバスで何度も月山に連れて 山ビジターセンター主催の行事に参加、 食べたことも懐かしい。 の雪解水を掬い飲んだりした。 いってもらった。雪渓を踏みしめ、滑落に神経を使いながら いた。四合目の有川林道を月山牧場に抜け、 昨年、月山俳句会の年間行事 月山六合目から八合目まで芭蕉が馬で越えた旧道を歩い 小屋をたたみ、下山する時埋めていった瀬戸物も残って あいにくの雨で、八合目に到着の頃は土砂振り。 「月山 山 山開き前の六月下旬 開吟行」が行わ ジンギスカンを 弥陀 5 た

選考下さいました諸先生に心よりお礼申し上げます。 第二回山形県20句競詠大賞を賜り大変感激しております。御 この度は、大好きな「月山」を詠んだ句で思いもかけず、

原を少し覗いただけで下山となった。

コロナ禍の中でやっと

実現した吟行だけに残念だった。

20句競詠大賞を受賞して

୬ଟର ୧୯୫୧ ବର ୧୯୫୧ ବର ୧୯୫୯ ବର 青田なる庄内平野見はるかす

山の空縦横の岩燕

修験者を抱く三山鳥渡る

優秀賞

鳥渡る
鳥渡る
鳥渡る
鳥渡る
鳥渡る
鳥渡る
小ボ離へ渡る丹の橋河鹿笛
滝しぶく金剛光を放ちつつ
神さぶる塔の風鐸蟬の声
夏霧の老杉にほふ修験径
額の花本坊跡のうすあかり
三日月碑を行きつ戻りつ梅雨の蝶
着翁や青苔かをる南谷
ゆくりなき落し文なり芭蕉句碑
道すがら赤翡翠の遠こだま
汗落つる磴に彫られし徳利ぞ

霊峰の水ふくみたる稲穂かな あめつちへ八朔の護摩盛りゆく 俳聖の真筆すがし法の月 雲の峰深まなざしの芭蕉像 霊山の息吹の茅の輪くぐりけり 風涼し合祭殿の梁の彫 河骨や水泡あやなす神の池 かたつむり二千四百余段這ふ

羽黒山の息吹

伊藤

厚子

憧れの南谷まで足を伸ばしました。芭蕉逗留の地であり、 優秀賞という身に余る賞を賜り、 羽黒山へは幾度か伺ったことはありましたが、昨年六月、 御礼申し上げます。

季に赤翡翠に会えると聞いたからでした。

卵塊でした。「有難や雪をかほらす南谷」の芭蕉句碑は、苔む していて風流です。 しきものが目立つ木があったので、 した。南谷別院跡は、礎石と河骨の池があるのみ。白い花ら 速力のある雲の峰」という立派な句碑が目に飛び込んで来ま い。すると、赤翡翠の声。(CDで聴いていたのでわかりまし 隨神門から始まり、急峻な「二の坂」を上り切り、「三の)澄んだ声に、疲れも癒えます。皆川盤水氏の の分岐点から右へ入れば南谷。緑滴る湿った径が心地よ 寄ってみると、森青蛙の 一月山

持ちです。心憎い角度。 ざしは不易流行を洞察するかと見えます。 容が、すっぽりと輪の中に収まるのです。三神をくぐる気 大屋根に藁束がちらちらと動きます。境内には茅の輪が置か れており、その前に立つと、あの大きな「三神合祭殿」の全 は吸い込まれるようです。丁度、 「三の坂」を登り、山頂に到着。荘厳な「三神合祭殿」に 20句への試みは大変楽しく貴重なものとなりました。 芭蕉像は月山の方へ向き、深まな 萱葺屋根の葺き替え中で、 羽黒山での体験

能太夫空に手を容れ柿を穫る

面

の睡りも稲の実る頃

幕間は火蛾が主役の乱舞かな

篝火を川に零して涼能

縦横に能衣の綺羅の土用干 農の手の能の手となる薪能 雪吊や能笛聞こゆ外厠 寒夜能三貫蝋涙果つるまで 能当屋弁慶飯の夜食かな

直面の日焼のシテや水焰能

王祇祭山椒の香の焼豆腐

番酒桟敷に賜ふ寒燈火

直 面

摺り足の小面仄と息白し 能鼓いよいよ佳境霰打つ 寒気踏む児の声響く能舞台 地吹雪や見え隠れして能の村 捨てられし燠ほこほこと雪の中 神饌や榾くぶ足して豆腐焼 寒月光柱が死角能当屋 直面の仏面なりぬ寒夜能

の未熟さが身に沁みます。

で、「王祗祭」に関わる一年を通した作句を致しました。「直面 川能」を上梓しましたが、まだ詠み足らぬ事がありましたの

この度、20句競詠作品の募集に投句致しました。

句集「黒

牧

一十句は、諸先生の選を頂き深く感謝申し上げます。

俳句の勉強して三十年、未知の世界の奥深さに、また、

己

牧

靜

する。 り」の諺にもあるように、俳句においては大会や、投句に積 うまくなってから、発表する事は奥ゆかしく恰好良いことだ を結び、万人の師となる。」 た例しはない。天才と言われる人より、こつこつと努力して と勘違いしがちだ。しかし、このような人は、芸を身につけ を受けました。要約すると、「芸能を身につけようとする人は いれば年月が、成功を導く。最後は、上手と言われ芸位に達 吉田兼好の『徒然草』を勉強しました。第百五十段に感銘 いろいろな趣味であっても、 世に一流と言われる達人も、下手から始まり努力が実 好きから始まり「継続は力

直

面

の会員にも意義があると誘い勉強しています。 極的に参加することが、上達の「近道」と思う。

所属する会

第3回山形県20句競詠俳句賞の御案内

第3回20句競詠作品を募集します。応募用紙(緑の用紙2枚)を同封しました。20句に題をつけてお送りください。

応募要項は次の通りです。たくさんのご応募をお待ち申し上げます。

締切 令和3年12月21日(火)

応募 要項

- ・応募者は山形県俳人協会の会員に限る。
- ・応募作品は題をつけて20句。新作、未発表句(どこにも投句したことのない俳句)に限る。
- ・前書き、及びふりがなは原則禁止とする。
- ・応募作品は1人1編とする。
- ・「投句用紙」に、題名と作品20句を楷書で、濃く、ハッキリと書くこと。(氏名 は書かないこと)
- ・「申込用紙」に記入の上、「投句用紙」と一緒にお送りください。
- ・応募料2.000円も句稿と一緒にお送りください。(現金書留または定額小為替)
- ・送り先

〒994-0012 天童市久野本 4 - 11 - 11 伊藤寛方 第 3 回 20 句競詠俳句賞係

- ・締切は、令和3年12月21日(火)必着。
- ・発表・表彰(大賞・優秀賞・入選) 第45回山形県俳人協会通常総会
- ・句稿はお返しできませんので、必ず控えを残してください。
- ・応募作品の変更には応じられません。

選考委員

委員長 伊藤 寛

委 員 阿部月山子・鈴木 正子・黒坂 重政

工藤 稲邨・武田 菜美・伊藤 ふみ

句文集

『黄水仙

令和三年三月発行

猪股とみを

句集 一舟唄

伊藤 啓泉

令和三年四月二十日発行



アカシアの花の膨らむ最上川 老牛の反芻してる終戦日 雪囲解かれ自在の風となる 玫瑰をゆする海鳴りありにけり 余生とは色なき色の七変化 冷奴くづして吾もくつろげり

端居して戦の話して帰る

元朝や雪に小言を吐く漢

自選十二句

老ゆるとは手付かずの萩乱れ萩 水底の貌見せてゐる晩夏光 恙無く暮し爼始めかな 月山の裾まくりあげ山笑ふ

令和二年度橡紅花俳句会作品集 合同句集❖

第十八号

蕗の薹一つ見つけし寒土用 紅花や嫁取橋を渡り来て

冬草の青き岩間を水奔る 傘の上に弾むトレモロ春霰 小雨なか仰ぐ夏越の御堂かな

首垂れ雪乞ひ神事厳かに

塩野 朝倉 吉田 澄江

樋口としこ 森谷留美子

岸桃魚 抄出)

「大槻」令和二年年間句集 第三十六号 東根俳句会

解れつつ色加へ伸ぶ牡丹の芽 狼煙めく火合せ神事盆供養 トンネルの汽笛の谺紅葉狩

青山

阿部月山子

赤とんぼ里は鎮もる湖の底 クターンの調べしみ入る春の宵

晩秋や品川駅の旅心

ふるさとへ成人の日の大志告ぐ

参勤の一本の松新松子 海老反りにむづかる赤子春の雪

春立つや牛舎に並ぶ大乳房

避難所に一夜身を寄す梅雨出水

伊藤 井上たかえ

阿部美和子 阿部小夜子

大江 上野みえ子 猪俣とみを 洋子

柏倉ヤス子

川音の高き所に雛の宿

大根に味浸むまでの針仕事

合同句集「せせらぎ」

第十二号

「阿以」合同句集 色変へぬ松や大学六年目 単身の転地定まる菊根分 風呂沸かす煙匂へる里の秋 鳥海山の颪を孕む烏賊幟 雪渓の水ほとばしる蔵王山 独り身に神在月のお札かな 旅立ちの声整へて鶴帰る 米寿にも数多の夢や千代の春 日輪を我がものにして紅芙蓉 日の丸の目立つ一軒敬老日 三十を過ぎて未婚の冷奴 第五号 (終刊) 齋藤眞人 名和 名和 武田 庄司 結城トミ子 富樫 土田 髙橋 高橋喜恵子

鯉のぼり自由に泳ぐ過疎の空

初稽古竹刀一閃胴を打つ

石地蔵日射し分け合ふ返り花

長登 清野 佐藤 工藤

霧深く月山隠す山開き

伊藤ふみ

じいちゃんで心通じる初電話 月山の真白き高嶺雲に浮く 手を上げて屋根で挨拶雪下ろし

> 工藤キクエ 奥山みよし

抄出

令和二年度岩手県俳人協会会員作品集

岩手県俳人協会

令和三年一月一日発行

(第四十二号)

❖ 作品集 ❖

庄司りつこ

志鎌惠美子 太田 井上多桂子

想ひ出も共に仕舞ひて更衣 光陰の轆轤座いくつ鰯雲

父の忌のピッケルの錆夜の秋

最上紅花摘むやこころも染まるほど

水田惣二郎 堀野カツ子

柴田美智子

(志鎌惠美子 渡辺

母の日や着物の解れ繕へる 浅草寺古りし草鞋や大どんど 鶯の競ひあふかに麓村 青々と渡来の草や冬に入る

❖俳誌等❖

胡桃」季 刊 通卷

青瓢」隔月刊 通巻 二一〇号 一七七~一七九号

刊 通巻 七六七~七七二号

雪舟」月

❖ 会報等 ❖

宮城県俳句協会会報第一五一号 令和二年度版会報第三十八号 秋田蕗」第三十二号

岩手県俳人協会会員通信第二六七号

俳人協会宮城県支部 俳人協会秋田県支部

岩手県俳人協会 宮城県俳句協会